

皆さん、こんにちは。初めに、今日と一緒に読ませていただくところを音読させていただきたいと思えます。テキストの十四頁ですね。今日は「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」をお話しさせていただきますが、この頁の初めから一緒に拝読させていただきます。どうぞ遠慮されないで声にお出しくださってお願い致します。

顕示難行陸路苦 信樂易行水道樂

龍樹菩薩はさとりにの道を明らかに示し、
陸路をただ一人自力で歩く、
苦しい難行よりも、みんなと共に船に乗り、
仏力に任せて楽しく渡る念仏の易行道をすすめられました。

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定

だから、阿弥陀仏の本願を忘れず心に憶（おも）い
念じるならば、本願自然（じねん）のはたらきで、
即座に、必ずさとりを開く身と約束され、
迷いに退かない身になります。

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

ただよく、常に如来のみ名を称えて、
大いなる悲願の恩恵に応えよ、と説いています。

どうもありがとうございました。

月日が経つのは早うございまして、七月の回でございまして。なんと申しますか、本当に猛暑でありますね。テレビではいのちの危険のある猛暑だということが述べられておりまして、今日は出席される方も少なくなるのではないかと感じておったのですが、沢山の方々がご出席くださりまして、本当に嬉しく思います。

先般、西日本の豪雨の災害がありまして、被災地の皆さまは大変ご苦労なされ、また深い悲しみを受けておられるのであります。生きておるといふことは有り難いことでもありますけれども、同時に、どういうことに出遇うかわからない。私は人間といふのはつくづく、遇縁存在だと思えますね。縁に遇う存在。どういう縁に遇うかはわかりませんが、誕生したその時からもう遇縁存在ですね。選んで生まれてきたわけではございません。生まれてみればこの父であり、この母であったといふことではございます。

一日一日、縁に遇うといふことが積み重ねて参りまして、縁に遇うといふことにおいては、いのち終わるまで縁に遇うといふことではございます。どういういのちの終わり方をするかといふことも、余程のことがない限り、予定通りには参りません。そこに生きるといふことの深さ、広さがあると思えますね。それは人間の予測、予定、計画を超えておるといふことではあります。いのちのおおいなるはたらき、促しにおいて開けてくる人生であると。

蓮如上人のお言葉の中に、疫癘（えきらい）の御文があります。疫癘で沢山亡くなられた方があることを悲しまれて、疫癘が原因で亡くなられたのではない。死の因は生、生まれたといふことである。生まれたといふ時、その時もう死ぬといふことは決まっているのである。そして、死の縁はど

ういう条件、どういふ状況で命終わっていくかということは無量であると。量り知れないご縁がある。このことを曾我量深先生が東京にいらした時に、熱を込めてお話しくださったことが印象に残っております。

◎補足◎ 四帖目 九通 疫癘の御文

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極楽に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとるときことと、うたがうところつゆちりほどももつまじきことなり。かくのごとくころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけまします、御ありがたさ、御うれしさを、もうす御礼のころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。
(真宗聖典 八二七頁)

六月二十六日に、京都の大谷大学で曾我量深先生の御命日(六月二十日)の法要が勤まりまして、お参りさせていただきました。沢山の先生方、先輩方がいらっしゃるのでありますが、私のようなものはとても呼ばれるような人ではないですよと申し上げたのですが、曾我先生に実際お会いをして仏法を聞かれた方が極少なくなってきたおるので、中津、来いということで、大谷大学の方にお参りさせていただきました。

沢山の方々にお会いできて、大変有り難い、感銘の深いことであります。勿論、大谷大学で曾我先生のお話を聞くことができ、また金子先生など、尊い先生方が沢山いらっしゃいますが、私にとってはやはり親鸞聖人の教えに会い、大谷大学で学ぶことができたということは大変有り難いことであるということをおもいます。

これはやはり大谷派の伝統というのがございまして、特に近代においては清沢満之先生以降の伝統ということがあって。曾我先生、金子先生という方々はそういう教えの伝統を受けておられた。私自身の印象から言えば、教えをいただき、そこに自己とは何ぞやという、そういう人間を突き動かしてくる問いですね。答えをいただいて感動して喜ぶということよりは、人間における根本の問いは何かという。

それが聴聞の中で、はっきりしてきて、それに応答してくださるのが本願であります。そこに苦悩を抱えて、かけがえのない大事な縁として生きていくことができるという。荒っぽい表現をするならば、答えの上にあぐらをかくのではなくて、人間が生身の身を持って生きておるといふその事実立って、一日一日教えに会い、学んで、人生の生きておるといふことがなんと深く尊い、何ものにも代えがたい事実であるかということをお教えられます。

曾我量深先生には、私自身が東京の教学研究所分室にご縁をいただいて学ばせていただきましたが、曾我先生のお元気な間、東京に毎年二回程お越しくださいませまして、お教えを受けることができました。曾我先生は特に東京というところを大事に感じておられましてね。それは清沢先生ご自身が東京に真宗大学を開かれたということがあって、曾我先生も学ばれたということがあるのです。

特に清沢先生は東大を出て哲学を学びまして、最優秀の成績だったと言われております。視野が非常に深く、広く、そして思惟、思索するということが本当に大事なこととしていただかれた。そ

の思惟が単なる思惟ではなくて、生活になるという。実験の宗教だということを言われましてね。実験ということはこの身の上に、それは本当に真実であるかということに苦悩し、問うて問うて、尋ねて尋ねて、明らかにしていくという。そういうふうな生き方ですね。

それはやはり私たち現代に生まれる人間にとって、そういうことはどうしても必然的な道であろうと思います。安直な答えでは間に合わないということがございまして。やはり、いただいた問題、出遇った問題について、本当に格闘して学んでいく。格闘する力も湧き出てくるという。人間の力には自ずから限界があり、相対的な力でありますけれども、人間が存在している以上、呼吸をし、血管が脈打つといういのちをいただいているという事実は、やはり問いが出てきてやまないという、そういういのちの息吹ですね。呼吸があるということは大変なことだと思いますね。吐く息、吸う息、とつとつと脈打つという。それは人間が現役であるという私は証しであるということ、教えに遇うことにおいて知らされるのであります。

だからいわゆる常識的な意味での余生ということとは軽々しく言えることではありません。むしろ歳を取っていよいよ機能が衰えてくるというところに、生身の現実があるということではないだろうか。そしてそれは沢山の方々がそういう事実を生きていかれたということであると。そういうことにおいて親鸞聖人が九十歳までご長命であられたということはまことに意味が深いと思いますね。

その親鸞聖人が表されました『教行信証』の中の「正信偈」をいただいでいくことができるという。明順寺様にお参りさせていただく度に感銘を受けるのは、皆さん方と一緒に勤めをさせていただいて、その後に聞法の座が始まるという。そのことを大変有り難く思います。今日もご導師を表さんがお勤めくださって、そういうことが本当に尊いことであると思います。まあこれはカッコに入れて、親鸞様が慶ばれたであろう。「正信偈」は本当に一人でも沢山の方々に読誦されて、そしていただかれていったということが何よりも尊いことであると思うのであります。

今日はですね、テキストでは十四頁の、「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」。現代語訳としては、「ただよく、常に如来のみ名を称えて、大いなる悲願の恩恵に応えよ、と説いています」。

これは七高僧の中の龍樹菩薩を讃える最後の一行二句になります。龍樹菩薩は、第二の釈尊と言われる程、偉大な存在であって、八宗の祖師とも言われております。非常に大きなお仕事をなさった方ではありますが。その龍樹菩薩のお仕事としてはですね、仏道ということにおいて、難行道、易行道ということをはっきりと示されました。自力を励んで覚りに至ろうとする難行道と、弥陀の本願に乗托して生きる易行道。難易二道ということをはっきりするという大きなお仕事をなさった。

前回学んだところでは、阿弥陀の本願を憶念して、自然に即時入必定という。即時ということは、時間を置かないで、その時直ちに必定に入る。必ず仏になる身と定まる。そういう位にいる。不退転。迷いの生活、闇の生活に退転しない。

これはあらゆる人間の根本志願なのですね。仏法を求める人も求めない人もあるということは、現実の姿でありますけれども、仏法を求めない人に根本志願がないかということ決してそうではありません。別の言葉で言えば、無意味なまま人生を終わることはできません。やはり人間に生まれたということがかけがえのないどんなことがあっても、かき消されたり、闇に飲み込まれたりすることのない、大事な意味があったということを見出さなければ、その人はその人の人生として実現しない。成就しない。人間成就しないということがございます。

仏法は人間が人間であることを成就する。実現すると。大事な意味がありましたと。本当に意味がありましたと。平たい言葉で言うならば、よくぞよくぞ人間に生まれさせていただきましたと。悲惨な言葉は、人間に生まれて来んほうが良かったと。何故悲惨なことかと言えば、私自身が青春時代そういうことを、恥ずかしながら思ったことがあります。そこでは両親すら受け入れられない。

やっぱり勝手に産みくさってということになるわけで。人間成就ってということは、本当に大事に育ててくださった親すら、受け入れられないという問題が出て参ります。

本当に根本志願ということは、生死の迷いを超えるということですね。出離生死。これは現代の人間の問題です。先程、西日本の被災地のことを申しましたが、このことに悲しまれ悩んでおられる方々がいかに多いかですね。死ぬということは頭ではわかっているつもりであったけれども、まさか自分の親が、自分の子どもが、自分の連れ合いが、友だちがいのち奪われていくとは思わなかったと。そこに不安と悲しみが起こる。

仏法では大慈悲ということが外せませんけれども、この慈悲の悲の原語は、サンスクリットのカルナー。カルナーというのは悲鳴ですね。私は、人間存在は悲鳴存在であると。何かあれば悲鳴を発する存在であると。指一本切られたってね、お腹の具合が悪かったってね、また大事な人が亡くなっても悲鳴を発する。

未だに眼の中に焼き付いておりますけれども。私がまだ小学生の低学年の時だったと思いますが、夏場に海水浴に行った時に、二才のお子さんが急死されたのですね。その時にお母さんが真っ青な顔をしてね、子どもを抱いてね、泣いておられた。その姿が未だに焼き付いております。何人かお子さんはいるのですが、何人かの中の一人ではないかってそんなことではないのです。一人ひとりがいのちなのですね。そこに悲鳴を発するということがあるわけです。そういう慈悲の悲は悲鳴を発する。悲鳴を上げるようなものと一つになってということですね。

安危を共同するという言葉があります。人間の安らぎも、危というのは危うさですね。悲鳴を発するような。如来の大悲はそういう存在と、共同、共に同じくする。人間はそこまでいきません。大事な人の死には、そういう感じはするけど、全くご縁のない人様の死は、平気です。事によったら事件が大きいほど面白いということすら思わないわけではない。人間にはそういう闇があります。これはやはり人間にはできない。私にはできない。如来様が、この身と一つになって、悲鳴存在と一つになって、悩んでくださると。悲鳴を発してくださるというそういうふうないのちの呼応ですね。

それから生死というところには、生まれて生きておるとということと、死んでいくということと、その人生全体ですね。そこに人間には非常に深い愛着がある。執着があるわけです。そういうものに縛られてやまない。それを乗り越えていくところに、人間としての歩むべき道が教えられます。本願を憶念して、自力の心を離れ、自然に、即時に必定に入るということは、これはあらゆる人間の根本志願ですね。

それから今日のところになりますけれども、如来の名を称するということは、大悲弘誓の恩に応えるという。これはもう非常に大切な、大事な意味であります。何故かと言うと、普通現実において宗教と言うと、ともすれば祈願、祈祷。現世利益の宗教になります。お参りしてお供えしてそしてだから願いを叶えてくださいと。

よく病・貧・争と言われますが。現代は医学が進歩し、経済的にも発展を遂げておりますから、状況は違うということがあるでしょうけれども、内容、本質は、私は変わらないと思いますね。病というのは病むということね。私の生まれた村にある真言宗のお寺さんですけれども、境内の一つの堂に、結核の象りとかね、杖とかね、そういったものがいっぱい入っていました。それは病気が治るようにという祈願ですね。

それから貧ということもものすごい問題。貧乏に喘いできた多くの人たちはね、一部の人たちが豊かで、銀飯を食べたけれども、米を作りながら米の飯を年に何度かしか食べられないという貧しさということがあった。子どもが学校へ行って学びたいと言っても、学べない。十代から丁稚奉公（でっちぼうこう）出してということがありました。だから貧ということとは愁（なまじい）を這う

ような。人身売買ということがあったわけでありまして、私たちの小さい時にはそういうことを聞きました。よく子取り婆にやるぞということと言われてね。サーカスの芸にするぞとかね。それはもうね、実感をもってね、本当に人身売買ということも事実あったわけですから。売春ということもあるでしょうし、いろんな問題がありますから。だから貧ということとは深刻な問題。

それから争い。これはもう嫁姑の問題から兄弟喧嘩から国家の問題から、争いということが尽きません。そういうものがなくなるようにというのが人間の素朴な自然の願望ですね。祈祷せざるを得ない。お願いせざるを得ないということがあられるわけです。私ははっきり申し上げますと、そういう人間として辛い時、困った時にどうしても祈願せずにはおられない、祈祷せずにはおられないようなそういう人間の願望を受け止めて、受け止めてですね、人間自身がどれ程尊いのちをいただいているかわからないという、本当の意味の自覚、目覚めを促すという。これは仏法であり、親鸞聖人の本願の宗教であると。本願念仏の宗教であるというふうに受け取っておるものの一人であります。

そこにはですね、本願を憶念してこの自然に自ずから即時に必定に入る。この必定に入るということは必ず仏になる身に定まるといふ。必ず定まる。仏になる身に定まるといふことである。不退転。再び迷いの闇の生活に飲み込まれることがない。人間に生まれたといふこの事実を、現実の事実をどこまでも尊い事実として、吐く息、入る息、呼吸のある限り、脈のある限り、現実の尊いこのちの事実をいただいて生きておる身であるといふ。そういう本当のいのちの尊厳さですね。尊厳性。尊く厳粛であると。そういうことをいただいていける道が念仏の道であると。それは一部の人の一部の願いではなくして、あらゆる人間の根本の志願であります。

だから、阿弥陀の本願、四十八願の中では、特に十方衆生の救いを誓われた十八願、十九願、二十願には、十方衆生という名前を繰り返し呼んでおります。生きとし生けるものですね。その救いを誓い、願われた。十方衆生ということが、人間中心主義ではないということが今の時代、私は殊に大事な意義を持っていると思います。何故ならば、人間は人間だけで生きているものではありません。人間だけでは生きられません。生きとし生けるもの。動植物、微生物まで含めてですね、量り知れないいのちの世界の中にその一種として人間も誕生し、共に生かされて生きるということが人間であって。本願の十方衆生という呼び声にはそういう深さがあると。広がりがあるといふふうに私は受け取ることができると思っております。

例えば農家の人は自然のいのちということを感じなくては生きていけないわけですから、麦にしても稲にしてもね。やはりあらゆるいのちあるものと共にあるということ。それからのいのちの尊さといふことは今、科学的な文明が非常に驚く程進んでおりますが、それだけに土に汚れるような、本当に汗みずくになって田を耕すようなそういう基礎作業といふものを忘れてはならないといふふうに私は感じております。

ただよく常に如来の名を称えてといふ。この唯という言葉は親鸞においては本当に深い、大事な意味があります。これは『唯信鈔文意』という仮名聖教がありまして、その『唯信鈔文意』の言葉についてですね、注釈されました。

「唯信抄」といふは、「唯」は、ただこのことひとつといふ。ふたつならぶことをきらうことばなり。また「唯」は、ひとりといふところなり。「信」は、うたがいなきところなり。

(真宗聖典 五四七頁)

こういうふうに親鸞聖人は、信心一つということについてね、信心要であるということについて、唯といふのはふたつならぶことをきらう。あれもこれもではないと。ただこのこと一つであるとい

う。これはあらゆる人間の根本の志願、要求に応えるのであると。あれもこれもって言っていたのでは間に合わない。ただこのこと一つというのは何かと、根本の問題は何かと。そしてですね、その一人一人が本当に存在して生きておる意味を見出すことができるという。だからこう註釈それ自身ね、非常に深い親鸞聖人自身の出遇われた世界の深さが、表されているわけです。如来の名を称するという事は、ただこのこと一つであり、ふたつならぶことをきらうということであり、また一人ひとりが本当に念仏を申すということにおいて自律をしていくと、独立をしていくというふうな意味ですね。

「正信偈」の中にはこの唯という言葉が何度か出て参りまして、非常に大事にしていることがわかるのですが。テキストの十八頁。一行目ですね、これは曇鸞大師を讃えるところですが、「往還廻向由他力 正定之因唯信心」。仏になるということは正しく定まる原因となるのは唯信心であると。信心このこと一つであると表されておりますね。

それから十九頁、道綽禅師のところでは、「道綽決聖道難證 唯明浄土可通入」。ここにただ浄土の教えが通入すべき道であるという浄土一門が、唯一無二の道であると。ただこのこと一つという。

それからですね、善導のところは独明という、二十頁の大きな二行目の善導独明、独り明らかにという独明という言葉がありますから、それも勿論でございます。

二十二頁ですね。これは源信僧都を讃えたことですが、大きな段の二行目。「極重悪人唯称仏」唯仏を称すという。極重悪人ということが、人間存在の自分自身の自覚なのです。教えを聞いて、聞法して気が付くということがないと、極重悪人は人様のことだと思ふのですよ。聞いて聞いて、尋ねて尋ねて教えられていくと、ああ自分は極重悪人であったかということに気が付く。これも大変な意味ですね。そこにただ仏を称すると。念仏の道が開かれておると。

それから最後の二十四頁に、「道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説」。ただこの高僧の説を信ずべし。このこと一つということですね。だからあれもこれもというところには人間の功利性がどうしてもね、付きまとうわけです。いのちの危機というのは功利性では間に合わないわけですよ。本当にもう有無を言わず死なら死の事実に遇う他ないということがありましてですね。ただよく常に如来の名を称するという事は長い人類の迷いの歴史の中で、大いなる道が開かれてきたというそういう感動の讃歌、讃嘆の歌ですね。

能くという字もこれも非常に言葉が厳密ですね。能くということは、私は、能動性であると。受動性ではなくてね、湧き起こってくると。これには人間というのはね、はっきりしているのですよ。やりたくてやっているか、仕方なくやっている。金になるからやっているかで、出るのですよ。それ程正直なものです。この能というのはね、能くというのはいのち自身の中から湧き上がってくるようなそういう能だと思いますね。

帰命も南無も、南無は帰命ですが、これは親鸞聖人の了義ですが、

「帰命」は本願招喚の勅命なり。

(真宗聖典 一七七頁)

南無阿弥陀仏の南無というのは本願、阿弥陀の本願が、招く喚ぶ。本当に呼び覚まし、招く、そういう本願招喚の勅命。勅命というのは絶対的な命令です。天皇さんの命令ぐらいではないのです。天皇さんの命令は、特に戦前は大変きつかったですけどね。ああいう時代は決してあってはならないと思います。背くことができない、本当に存在自身の奥底から促してやまない、そういうふうなはたらきですね。本願招喚の勅命。

だから念仏においてそういうはたらきが、私の上に起こる。常にというのは寝ても覚めてもですよ。人生の全体、全人生。称えると。南無阿弥陀仏の名を称える。名を称えて、本願の心に称う、

相応すると。称えるということとはですね、自分の都合の良いようにしてくださいではないのですよ。本願のお心に聞きですね、そして本願の心に生きると。そこにただよくつねに、如来の名を称する。阿弥陀如来の名号、自分自身の上にも、南無阿弥陀仏と呼ぶことができると。声に出して読み、思い、念ずることができる。そういう念仏の教えです。それはここにいる今、呼びかけられておる。

これは竹部勝之進さんという、だいぶ以前に亡くなられた方の歌なのですが、『まるはだか』という念仏詩集の中の一首なのですが、「ココ」という。今このココという詩がありまして、カタカナで書かれておりますが、

私は今ココにおります
ココが有り難い
私は今ココにおります
ココより他に私の居る場所がなかった

という詩がありましてね。これは大変な詩ですね。迷って辛い時には、ここに居りたくないわけですよ。死んでしまえとかね、どっかに行きたいとかね。そういうふうな人間は限りなく願望の妄想の夢の中に逃げていこうとするものでありますが、そういう妄想の願望の夢から覚めてここに居ることができるということは、大変なことですね。浄土の光に照らされると、この娑婆の現実の世界に生きることができるという、そういう大事な意味があるわけです。

それから称ということは親鸞聖人のお言葉で、称は名を称えるということなのですが、

称は、はかりというところなり。はかりというは、もののほどをさだむることなり。名号を称すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなければ、実報土へうまるともうすところなり。
(真宗聖典 五四五頁)

称名の称ということについて丁寧な注釈をしておられます。はかりということとは、その存在自身の尊さ、重さということを実際に教えてくださるという、そういうものでしょうね。

人間はあの人はどういう人だとか品定めすることは好きですが、人間の品定めではないのですよ。こういうものの程というのは、人間存在、それ自身の尊厳ですね。自分のいただいた身でありながら、自分のいただいておるいのちがどれ程尊いものであるかということに気が付かない。本人は知っていると思っておる。知っておると思っておるのは自分の邪見でしかないという問題があるわけですよ。そこにどうしても念仏がなければ、本願念仏がなければ自分のこと一つがわからないという意味があるかと思えます。

名号を称すること、一声一声聞く人という、名号を称えるということが名号を聞くということになっています。称名はですね、聞名となるという。聞名、聞くということは信心を表す。この聞くということは、本当に私は人生の要だと思えますね。人間の生活においての要だと思えますね。素朴な意味では、人様の声が現実に語っている意味が消えるかということがありますね。人類の歴史が繰り返してきているのですけども、大自然の災害に遭うことによって、人間の力及ばずと。人間の量りでは量れないものがあるという。人間よ、おごることなかれというね、そういう根本問題が問いかけられているわけですよ。そういうことが中々消えないということがあるわけですね。

しかしその聞いてきた歴史ということをおぼえてしまう。それは夫婦の間だって親子の間だって隣人の間だってその人の声を本当に聞いているかとなると、聞いているとは言えない。誠実になればなるほどね。聞いていると言ってしまうえば人間のおごりになってしまうという問題があると思いま

す。だから聞くということは非常に深く尊い重い言葉であります。

そういう「唯能常称如来号」ということは、ただよく、常に如来のみ名。如来のみ名、号、一般的な意味は叫びでしょ。号令でしょ。本願が南無阿弥陀仏の念仏となって、名のり出て人間に呼びかけてくださった。その無明の群賊からですね。無明の闇をさらいですね、如来の号というようなことはもの凄くリアリティのある生き生きとした言葉ですよ。それが中々消えないのですよね。

例えて言えば、もう何十年も昔の話ですけど、歳取った親は子どもが博打を打ちに行って財産をすってんてんにしてしまう、そういう博打を打ちに行く姿を親が悲しんでいる。どれ程悲しんでいるかわからないのだけど、博打を打ちに行くその子どもには聞こえない。悲しいことだということを知ったことがあります。日本はカジノが始まるようでありませぬけれども、政治家は何を考えておるのですかね。本当に人間の最も深い叫びに耳を傾けているのかという問題があります。

人間自身の中に闇を貫いておる呼びかけがある。それが如来の号ですね。呼びかけですね。南無阿弥陀仏という念仏となって、南無というのは帰命でしょう。帰れと。本当に大事ないのちの故郷、依り処、目覚めの世界へ帰れと、さあ帰ろうと。そういう呼びかけですよ。そういう呼びかけの中に、「唯能常称如来号」、ただよく、常に如来のみ名を称えて。これも親鸞聖人ご自身が非常に実感を持って龍樹菩薩に感謝しつつね、歌っておるわけですね。そこに応報大悲弘誓恩。大いなる悲願の、大悲の弘誓の御恩に伝えていく道がある。

人間中心の宗教では現世祈禱なのですけれども、人間中心ですね。その人間中心の心が破られて、人間中心であったと気付かされて、もうすでに大いなるいのちをいただいているじゃないかと。この身に受けているじゃないかということに目覚めてですね、大悲弘誓の恩を報ずると、伝えていくという。こういう人生は、大いなる人生ではありませんか。願望の人生ではないのですよ。報恩の人生です。恩に伝えていく人生。こうしたらこうなるからこうするのだという人間の計算づくめの在り方ではなくして、人生そのものを教えられてみれば、気付いて見れば、念仏の呼び声に気付いてみれば、大いなる恩恵をこの身に受けていたと。それに自分にできる全身全霊を挙げて伝えて参りましょうという、そういうふうなね、報恩の。報恩ということほど豊かなことはないのではないですか。大悲弘誓の恩に伝える。恩というところには身に余ることですね。身に余る恩をいただくという。

今ふと思い出しましたけど、私、香川県の讃岐ですから、小さな池が沢山あるのですよ。小さい時にその池に落ちこちてね。それを母が救い出してね。道を抱かれて走っている、それを覚えておるのですよ。母の印象というのは正面の顔の印象はないのですけどね。正面の顔の印象、一つはあるのですが、それは親父と喧嘩している時ですね。非常に悲しい。それから池に落ちこちてね、土手を走っている時。それから母の郷に行って、夜におしっこしている。前に電車が通っておるとね、抱かれておしっこしている。それからお袋が亡くなって、顔の上に白い布を敷いてある。思い出するのは四つのシーンですかね。池に落ちこちた。一つ間違えば死ぬところでしたね。気が付いてくれたのですね。そして抱き上げて走っているその必死さがね、未だに残っておるのですよ。

やはりそれは親の御恩ということ为例え、親の身を投げ出してでもという、それ程の恩ですよ。そういう親の恩も、如来大悲の恩に触れてね、本当にいただけるものだと思うのです。何故かならば、親の恩は希少で大事に違いないけれども、血を分けた我が子にはいのちをかけられるけど、無縁の人にはそこまでいかないと。憎たらしい人の子は間違いを喜ぶようなね、そういう人間のエゴイズムがありますから。どうしても如来大悲というところに帰らなければ、本当の恩恵を感じることにはならないと言い切ることができると思いますね。

ここに大悲弘誓の恩を、報ずべしという。報の道に伝えていく道があると。大悲弘誓の身。これは大変なことではないですか、今の時代の中で。こういうことが歌い上げられておる。感動をもつ

て歌い上げられておると。親鸞の歌われたその歌が私自身の生き方となっておるかということが、正しく問いかけられていると思われそうですがどうでしょうか。やはり感謝、謝恩ということが本当の豊かさでしょうね。なんかのためにする謝恩ではなくてね、本当に恩徳を感じる。

だから親鸞聖人が八十五歳の時に歌われた恩徳讃。

如来大悲の恩徳は

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

骨をくだきても謝すべし

という歌は人間の究極の歌ではないですか。一宗一派なんてものではないでしょう。歌われようとしている中身はね。人類を本当に抱えたような歌を親鸞様は歌ってくださったと。

最後に、親鸞聖人は沢山の和讃を歌っておられますが、龍樹菩薩についても、十首歌っておられます。その中の五首を紹介させていただきたいと思います。

本師龍樹菩薩は

大乘無上の法をと

歡喜地を証してぞ

ひとえに念仏すすめける

本師というのは深い意味があります。本当の真実のよき師です。この師に遇わなければ、仏道に入らなかったという。大乘というのはあらゆる衆生が共に救われていくことができる。無上というのはこの上ない。歡喜地という、これも不退転地ですけど。不退ということが歡喜地という言葉で。信心歡喜という言葉も第十八願の成就文にありますけど。歡喜というのはよくぞよくぞ表現してくださった。身を喜ばしめ、心に喜ばしめるという歡喜ということは、身心を挙げて人生をいただくことができる。よくぞよくぞ人間に生まれさせていただいて生きることができると、そういうふうな喜びですね。喜びのない人間の上に本当の喜びの生活を開くと。歡喜地を証してぞ、ひとえに念仏すすめける。いつでもどこでも誰でも称えることのできる念仏であると。

龍樹大士世にいでて

難行易行のみちおしえ

流転輪回のわれらをば

弘誓のふねにのせたまう

流転輪回のわれら。そのわれは親鸞ですよ。流転輪回、流転し輪回してやまないようなそういう私たちを、龍樹菩薩が難行易行の道を教えて、本願に生きる易行道を、弘誓のふねにのせてくださったという。

本師龍樹菩薩の

おしえをつたえきかんひと

本願ころにかけしめて

つねに弥陀を称すべし

私が特に印象に深いのは、

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

これはね、こういう歌に遇うとよくぞよくぞ歌ってくださったという。生死の苦海ほとりなしというのは際限がない。ひさしくしずめるわれらをば。そこにのみ込まれて沈んでいるわれら。親鸞の言葉遣いの中でわれらということがよく出てくるのですが、これは非常に大事な言葉遣いですね。親鸞はいつも煩惱の衆生。救われざる人間の姿。そこに立っておられる。そこに立って、本願の光、念仏に遇うと。そういうことが徹底しておるのですね。

恩愛はなはだたちがたく
生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし

これも実感のある、リアリティのある歌ですね。はなはだというのは平仮名で書いてありますが、当てればですよ、甚だ。恩愛が尽きないですよ。本当にこの念仏の生活、ただ念仏三昧のそういう生活をいただくと、罪障を滅し度脱せし。罪障。これも思い切ってますね、罪障を滅し度脱せしという。罪、障りですね。愛欲、恩愛の情、エゴイズム、自力の計らいということにおいて、自分が見えなくなり人様が見えなくなるという。そういうふうな生活を、罪障を滅し度脱せし。それを、闇を超えて本当に開かれないのちの深い躍動を得ることができると。御同朋、御同行の世界に生きることができるといふそういう感動をもって、歌い上げられております。短い「正信偈」の偈文ですが、そこに込められておる内容は非常に深いものがございます。

一応これで龍樹菩薩の書かれたところを終わらせていただきまして、今度は天親菩薩のところに入ります。どうもありがとうございました。